

# 平成6年琵琶湖大湖水に関わる考古学資料

—用田政晴氏表採資料を中心に—

中川 永／大西 遼

豊橋市文化財センター・滋賀県立大学人間文化学研究所博士後期課程単位取得退学  
／愛知県陶磁美術館・滋賀県立大学人間文化学研究所博士前期課程修了

## はじめに

平成6年の全国的な渇水は、近畿の水瓶である琵琶湖にも大きな影響を及ぼした。6月以降に低下を始めた琵琶湖の水位は、9月15日には水位観測史上最低であるマイナス1.23mに達した<sup>1)</sup>。この影響により、琵琶湖各地で通常では湖底に没している遺構・遺物が姿を現すなどの現象も確認されている<sup>2)</sup>。

本稿で扱う遺物は、2015年度に滋賀県立琵琶湖博物館をご退任された用田政晴氏が当時表採されたものを中心とし、現在は同博物館に所蔵されている。また用田氏は当時の景観を数多く写真として記録されており、それらについても併せて取り上げたい。

## 1. 遺跡の位置と推定される当時の湖岸線

今回対象とするのは、長浜市下坂浜千軒遺跡、土川湖底遺跡、及び米原市琵琶田川湖底遺跡である(図1)。

このうち下坂浜千軒遺跡は、平方町と下坂浜町の

沖合に所在し、行政上は平方湖岸遺跡の一带に位置する。長浜びわこ大仏で知られる良疇寺の水没伝承が残されており、近年まで建物の礎石や井戸跡が見られたという。湖底の潜水調査では、立木根や杭などの遺物が確認され、放射性炭素年代測定法による年代測定が行われた。また湖底・湖岸部における湖底地形の応用地質学調査からは地震被害の痕跡が確認され、これらの成果から、天正13年(1586)に生じた大地震によって側方流動<sup>3)</sup>を生じ、湖底に没したと結論づけられている〔林・釜井・原口2012〕。

土川湖底遺跡及び琵琶田川湖底遺跡は、神明キャンプ場付近に流れ込む河川河口部に所在する遺跡である。行政上は、土川湖底遺跡として周知され、琵琶田川湖底遺跡もその範囲に含まれている。これまで本格的な調査は行われていないが、過去には縄文土器や須恵器、山茶碗が採集され、上流からの流れ込みのほか、断続的な長期間にわたる集落遺跡の存在が想定されている〔近江町教育委員会1987〕。

## 2. 遺物について

### (1)資料提示の指針

本稿で扱う資料については、湖底遺跡表採という性格上、ローリング等の影響を受けるものもあるが、端部をもつものや叩き痕をもつもの等、何らかの特徴を見いだせるものについては可能な限り資料化を行っている。また遺物の年代観については、田辺昭三〔田辺1981〕、續伸一郎〔續1995〕、百瀬正恒・近江俊英〔百瀬・近江1995〕、山本信夫〔山本1995〕、藤澤良祐〔藤澤2005〕、岩田隆〔岩田2006〕、愛知県史編さん委員会〔愛知県史編さん委員会編2008〕〔同2013〕、山田邦和〔山田2011〕の各論考によっている。

### (2)下坂浜千軒遺跡表採の遺物

1～30は下坂浜千軒遺跡表採の遺物である(図2、3)。このうち、2・23・25は滋賀県立大学林博通研究室(当時)の調査によって確認されたものであり、特に2.25は既報告のものを再実測している〔林・釜井・原口2012〕。



図1：湖底遺跡位置図

1. 下坂浜千軒遺跡 2. 土川湖底遺跡 3. 豊公園湖岸遺跡  
4. 下坂湖岸遺跡 5. 平方湖岸遺跡

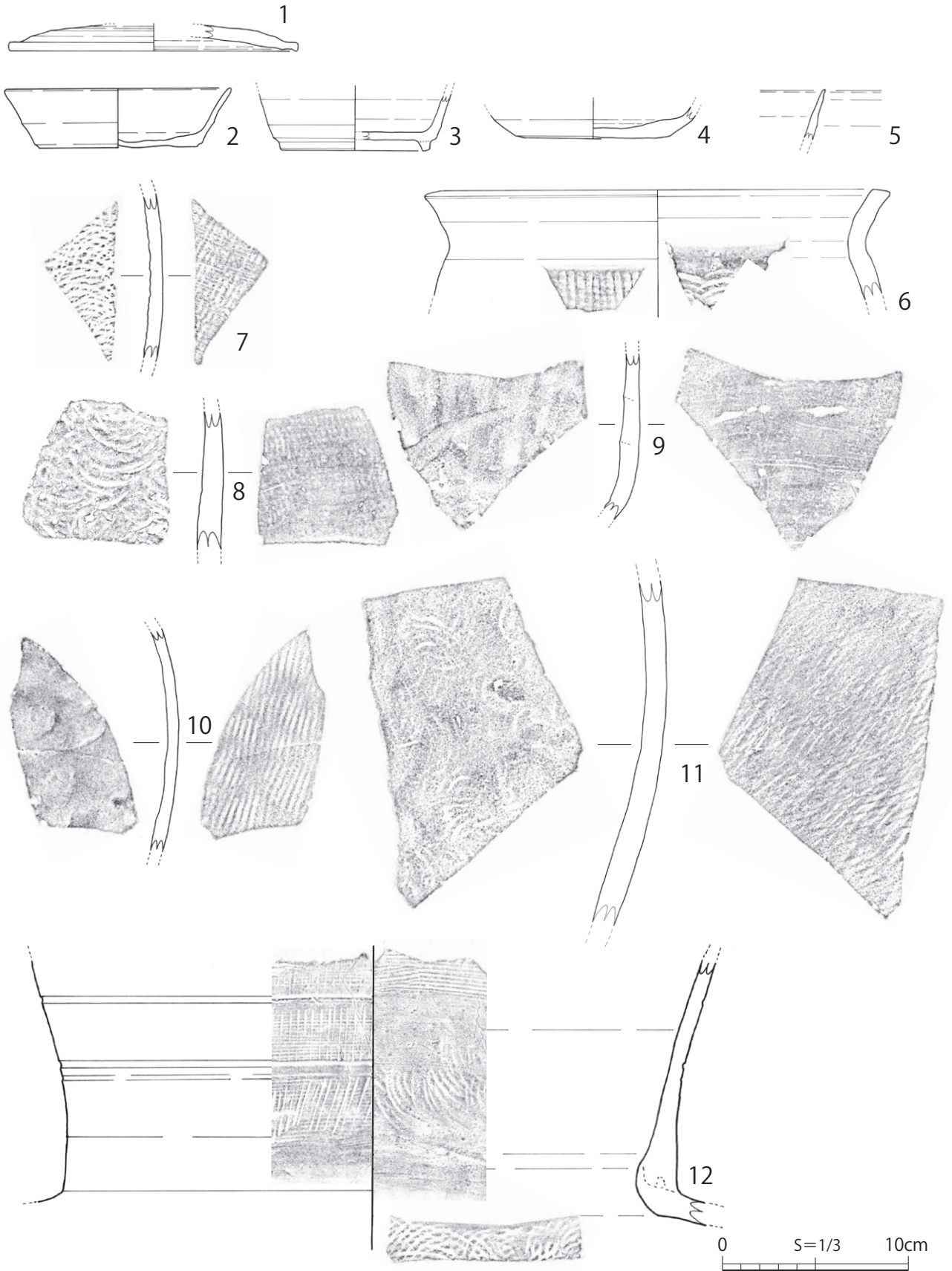


図2 下坂浜千軒遺跡表採遺物①

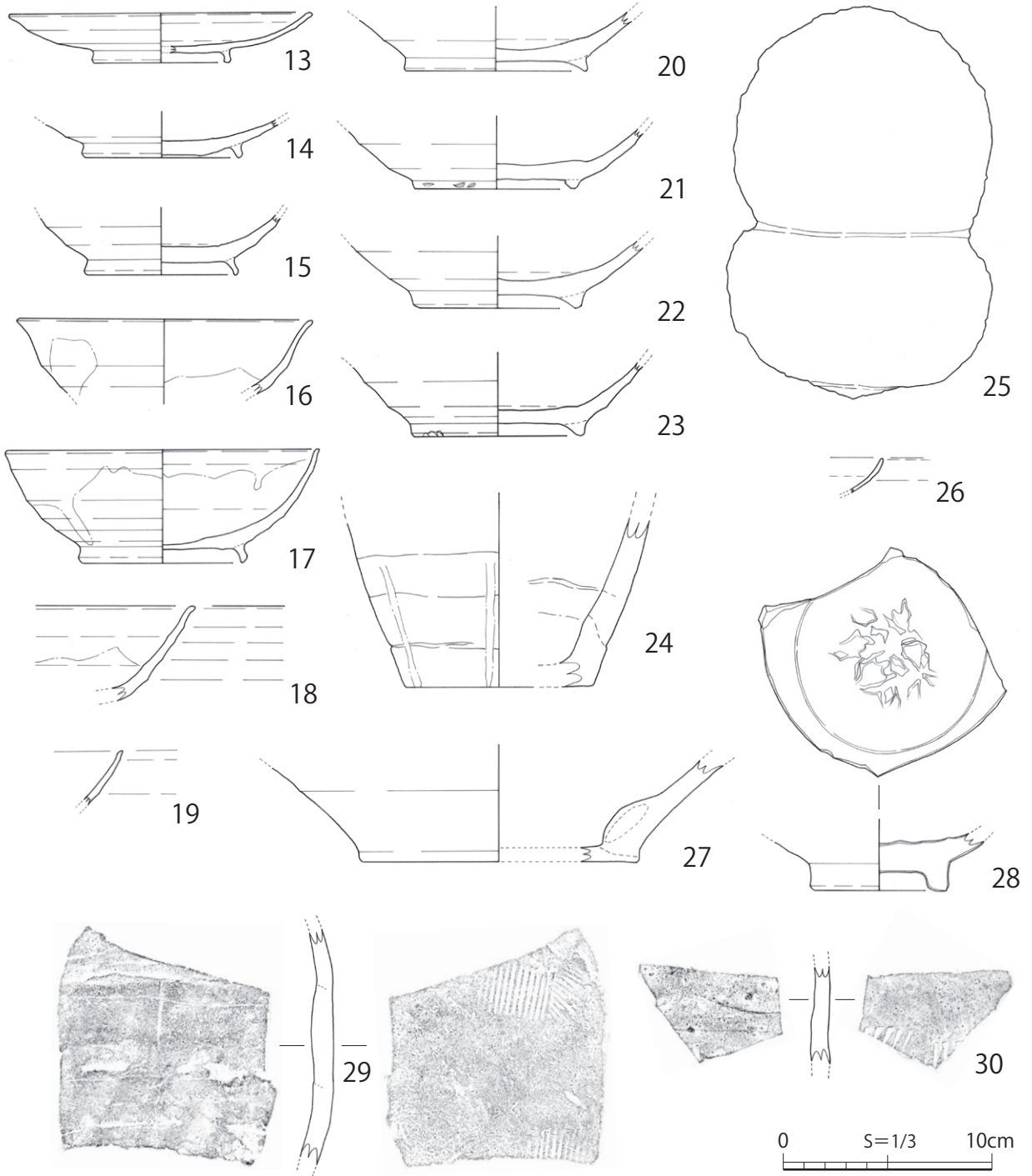


図3 下坂浜千軒遺跡表採遺物②

1は須恵器の杯B蓋である。天井部外面は回転ヘラ削り、内面および口縁部は回転ナデにより仕上げられる。口縁部は扁平で緩く屈曲する。8世紀後半代の所産である。

2は須恵器の杯A身である。焼成温度が低く、土師質に近い。底部はナデ消しているが、回転ヘラ削りの痕跡が残る。体部内外面は回転ナデにより仕上げられるが、見込中央部は不定方向ナデが認められる。8世紀後半から9世紀前半の所産である。

3は須恵器の杯B身である。底部および体部下方は回転ヘラ削りにより仕上げられる。8世紀の所産である。

4は須恵器の杯A身である。底部は回転ヘラ削りによるが、その他は回転ナデにより仕上げられる。8世紀の所産である。

5は須恵器の杯A身ないし杯B身である。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。7世紀から8世紀代の所産である。

6は須恵器の甕ないし甌・鍋と考えられる口頸部で、肩部も残存する。肩部外面は年輪の浮き出した平行タタキ、内面は同心円当具痕が残る。「く」の字口縁となるが、頸基部の強い回転ナデにより強調される。口頸部は内外面とも回転ナデにより仕上げられ、端部は面取する。8世紀代の所産と考えられる。

7～11は須恵器の甕体部である。

7の外面は平行タタキの後カキメ調整が施され、内面は同心円当具痕が明瞭に残る。古代の所産である。

8の外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕跡を粗くすり消している。古代の所産である。

9の外面は静止ヘラ削り、内面は粘土紐の痕跡が顕著に残り、無文当具痕が認められる。古代の所産である。

10の外面は平行タタキ、内面は無文当具痕が明瞭に残る。胎土は砂粒をほとんど含まず、古代の猿投窯系窯の所産と考えられる。

11は外面に斜格子タタキ、内面は粗めの同心円当具痕を残す。外面の斜格子タタキは、瓦生産との関係性も想定できるかもしれない。古代の所産である。

12は須恵器の甕頸部である。肩部と頸部の接合痕が比較的明瞭である。肩部外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕が明瞭に残る。頸部外面は、カキメおよび斜めハケにより調整されたのち、凹線文により文様帯を区画し、ヘラ描き平行列線文が施される。頸部内面については、中位は同心円当て具痕の

後ヨコハケにより調整し、上位はヨコハケで調整される。特徴的な成形・調整痕を持つが、古代の所産である。

13・14は灰釉陶器の皿である。

13は、内面ではローリング、外面では湖成鉄の影響を受け、施釉は確認できない。体部外面は下半に回転ヘラ削りを施し、口縁端部を短く外反させる。底部外面は糸切痕を回転ヘラ削りで消し、さらに擦痕をナデ消している。黒笹90号窯式に相当し、9世紀後半代の所産である。

14は体部全体を回転ナデで成形し、やや退化傾向を示す三日月高台を貼り付ける。湖成鉄の影響が全体に赤みがかかり施釉は確認できない。底部外面にはナデ調整を施すものの、施法はやや粗雑であり、うっすらと糸切痕を確認できる。折戸53号窯式に相当し、10世紀前半代の所産である。

15～17は灰釉陶器の椀Aである。

15は体部は全体を回転ナデで成形し、端正な三日月高台を貼り付ける。底部外面は糸切痕を回転ヘラ削りで消すが、ナデ調整は行わない。欠損のため施釉範囲を確認できないなどやや指標を欠くが、胎土の様子からは東濃窯産と推定される。大原2号窯式に相当し、10世紀前半代の所産である。

16は体部全体を回転ナデで成形し、口縁に向かいゆるやかに外反する。施釉は口縁端部から体部半ほどにかけて漬け掛けする。10世紀前半代の所産と考えて大禍ないだろう。

17は体部外面下半に回転ヘラ削りを施し、口縁端部を僅かに外反させる。また見込み部にはやや強い回転ナデを行い、底部は非常に薄く仕上げられている。底部外面は糸切後未調整である。三日月高台は外面下半をヘラ状原体で成形した後、ナデを施した丁寧な造りである。施釉は口縁端部を中心に漬け掛けする。折戸53号窯式に相当し、10世紀前半代の所産である。

18・19は灰釉陶器の椀である。

18は体部全面を回転ナデで成形し、口縁端部をわずかに外反させる。内面では体部半ばまで漬け掛け施釉を認めるが、外面では自然釉の影響により確認できない。折戸53号窯式に相当し、10世紀前半代の所産である。

19は口縁部付近のみの小片であるが、胎土は緻密で白色を呈し、東濃窯産と推定される。10世紀代の所産であろう。

20～23は山茶碗である。

20は体部全体を回転ナデで成形し、底部外面は糸切後未調整である。胎土は灰白色で堅く焼き締まる、常滑窯系のものである。尾張型3型式から4型式に相当し、11世紀後半から12世紀中葉の所産である。

21は体部全体を回転ナデで成形し、底部外面は糸切後未調整である。高台の貼り付け方は粗雑であり、一部は著しく内傾する。常滑窯系の灰白色胎土であるが、内面では自然釉や湖成鉄の影響を受け、黄色味が強い。尾張型4型式から5型式に相当し、12世紀中葉から13世紀前葉の所産である。

22は体部全体を回転ナデで成形し、底部外面の糸切痕は完全にナデ消される。高台の貼り付け方が粗雑であり径はやや歪であり、また全体にひび割れを生じている。常滑窯系の胎土であるが、全体にうっすらと湖成鉄が付着し、黄色味を帯びる。尾張型4型式から5型式に相当し、12世紀中葉から13世紀前葉の所産である。

23はローリングの影響をやや強く受けるものの、体部は全体を回転ナデで成形し、底部外面は糸切痕をナデ消している。尾張型4型式から5型式に相当し、12世紀中葉から13世紀前葉の所産である。

24は越前焼ないし常滑焼の壺体部であり、底部も一部残存する。内外面に粘土紐の痕跡が認められ、外面は横方向の板ナデ痕がある。内面は口縁部から降灰した自然釉が認められ、外面には自然釉の流下がある。胎土は砂粒をほとんど含まず、底部に離れ砂も認められないことから、常滑窯よりは越前窯の所産である可能性が高いと考えられる。12世紀から13世紀の所産だろう。

25は組み合わせ式五輪塔の空風輪である。黒雲母花崗岩製で、各部位における成形の省略傾向が強い。梵字等は認められない。15世紀末から16世紀代の所産である。

26は土師器皿である。端部付近の小片だが、ローリングの影響は弱く、湖底遺跡表採の土師質土器としては残存状況の良好な資料といえる。全体をナデにより成形し、端部は緩やかに立ち上がる。16世紀代の所産であろう。

27は越前焼の甕底部と考えられる。黄橙色を基調とするが、湖成鉄の影響により、外面はやや黒色味を帯びる。また一部には火ぶくれを認める。中世後期の所産か。

28は青磁碗である。龍泉窯系の釉調であるが、体部が残存しないためやや指標を欠く。施釉は全面に行われ、残部において鎬蓮弁文は確認できない。見込み部では草花文様を認めるが、成形は粗雑である。15世紀前半から16世紀前葉の所産と考えられる。

29・30は白瓷系陶器の甕体部である。

29の外面は粘土紐輪積の単位毎に平行線文の押印が認められ、内面は粘土紐の痕跡や指頭圧痕が残る。押印の様子などは常滑焼と共通するが、胎土が緻密であり、他の産地の可能性がある。12世紀を中心とした所産だろう。

30は外面に平行線による押印が認められる。内面は粘土紐の痕跡が残る。器壁は薄く、12世紀の常滑焼の可能性はある。

### (3)土川湖底遺跡表採の遺物(図4)

31～43は土川湖底遺跡表採の遺物である。このうち、31・33・34は本報告に伴い中川らが調査を行った際に確認されたものである。

31は弥生土器の広口壺と考えられる。底部ややや上げ底風に作り、体部外面には斜行する条痕を認める。この条痕は幅約3mm程度の棒状原体を5本程束ねた工具によって施す。内外面共に湖成鉄が付着し、特に内面では厚い。

32,33は須恵器の杯H蓋の天井部である。

32の天井部は回転ヘラ削りにより仕上げられる。TK209型式からTK217型式に相当し、6世紀末から7世紀前半の所産である。

33は天井部外面を回転ヘラ削り、その外周は回転ナデによる仕上げられる。内面は回転ナデにより仕上げられ、湖成鉄が付着する。TK209型式からTK217型式に相当し、6世紀末から7世紀前半の所産である。

34は須恵器のフラスコ瓶の体部と考えられるものである。体部がかなり薄く、他の器種である可能性も残る。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。7世紀を中心とした猿投窯系窯の所産と考えられる。

35は山茶碗である。ローリングをやや強く受け、破面は丸みを帯びる。底部外面は糸切痕を回転ナデにより消す。高台の刳圧痕等は認めない。尾張型3型式から4型式に相当し、11世紀後半から12世紀中葉の所産である。

36は瀬戸・美濃の灰釉平碗の底部から体部であ

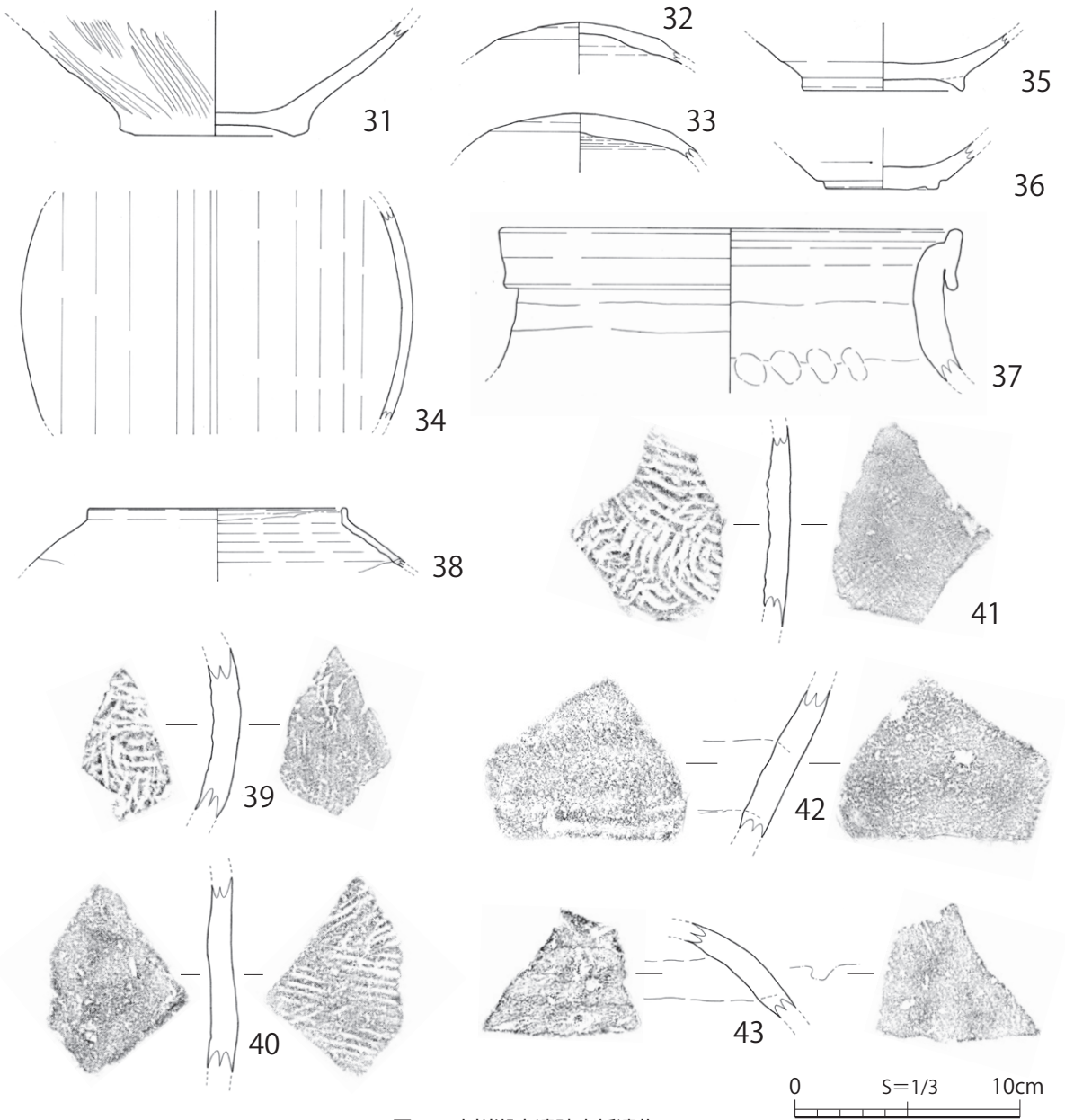


図4 土川湖底遺跡表採遺物

る。内面は全面に灰釉を施し、外面の残存部は露胎である。削出し高台だが、低く所々削出しの甘いところがある。古瀬戸後期様式に相当し、15世紀の所産である。

37は常滑の小甕の口縁部から頸部である。頸部下内面は成形時の圧痕が顕著に残る。頸部は基本的に横方向のナデ、口縁部は回転を利用したナデで仕上げられる。常滑窯の8～9型式に相当し、14

世紀後半から15世紀前半の所産である。

38は灰釉短頸壺である。破面付近には白色胎土による練り込みを認める。内外面全体に灰釉を施すが、内面ではひしゃく等により流し掛けし、外面には漬け掛け、口縁部のみハケ塗りを行う。近世の所産と考えられるが、詳細は不明である。

39は須恵器の甕体部である。外面は平行タタキをスリ消し、内面は同心円当具痕が顕著に残る。古

代の所産である。

40は中世須恵器の甕体部である。外面は六条一對の平行原体を用い、器壁に対し斜行→平行の順でタタキ成形を行う。内面には明瞭な痕跡を認めず、無文当て具を用いたのだろう。また長辺9mm、短辺1mm程度の海面骨針状の凹みを認める。色調は暗灰褐色を呈する。これら特徴から、珠洲焼である可能性を指摘し得る。

41は須恵器の甕体部である。外面は格子タタキをスリ消し、湖成鉄が顕著に付着する。内面は同心円に一部直行する直線を有する当具痕が認められ、長浜市西浜千軒遺跡で類例〔X類〕と分類したものが確認されているが〔大西2016〕、細部が異なり同一原体ではない。古代の所産である。

42は白瓷系陶器の体部である。内面は粘土紐の痕跡が顕著に残る。12世紀を中心とした時期を推定できる。

43は白瓷系陶器の肩部である。内面は粘土紐の痕跡が顕著に残る。外面は灰釉が横方向に刷毛塗りされる。12世紀の渥美窯の所産と考えられる。

#### (4)琵琶田川湖底遺跡表採の遺物(図5、6)

44～64は琵琶田川湖底遺跡表採の遺物である。

44は須恵器の杯B蓋と考えられるが、形態が特異であり他の器種の可能性もある。内外面とも回転ナデにより仕上げられる。口縁端部外面を面取する。8世紀を中心とした所産と考えられる。

45は須恵器の杯B身である。底部外面にヘラ切り痕を明瞭に残し、体部内外面は回転ナデを基調にしつつも見込は不定方向ナデで仕上げられる。高台は比較的しっかりとしており、内面端部はやや凹む。口縁部内面に湖成鉄が特に顕著に認められる。7世紀から8世紀の所産である。

46は須恵器の杯A身である。底部はヘラ切り後ナデで仕上げられ、体部内外面および見込は回転ナデにより仕上げられる。見込に「一」の字状のヘラ記号、体部外面に「つ」の字状のヘラ記号を持つ。8世紀を中心とした所産である。

47～54は須恵器の甕体部である。

47は外面では格子タタキが顕著に残り、内面は同心円当具痕が認められる。外面の格子タタキは、瓦生産との関係性も想定できるかもしれない。古代の所産である。

48は内面では同心円当具痕を持つが、外面にタ

タキ痕が認められない。古代の所産である。

49は外面では平行タタキ、内面は同心円当具痕跡をややスリ消す。古代の所産である。

50は外面では平行タタキ、内面は同心円当具痕が認められる。古代の所産である。

51は外面では平行タタキの後カキメ、内面は同心円当具痕が認められる。古代の所産である。

52は外面では平行タタキの後スリ消しているものと考えられ、内面は同心円当具痕が認められる。粘土紐の痕跡が認められる。ローリングの影響が強い。古代の所産である。

53は外面では平行タタキ、内面は同心円当具痕をややスリ消す。古代の所産である。

54は外面では粗めの平行タタキ、内面は同心円当具痕が認められる。古代の所産である。

55は山皿である。ローリングの影響が顕著で、詳細については判然としない。底部は一部で柱状に残す。尾張型6型式を中心とする時期に属し、12世紀後半から13世紀代の所産であろう。

56は山茶椀である。ローリング及び苔の影響で細かな調整は不明だが、底部外面は糸切後未調整と考えられる。高台は極めて低く貧弱である。胎土は猿投窯に近似する。尾張型4型式から5型式に相当し、12世紀中葉から13世紀前葉に所属する。

57は瀬戸・美濃焼の灰釉洗ないし灰釉折縁深皿である。底部は残存状態が悪く詳細は不明だが、体部外面は回転ヘラ削り、体部内面はナデにより仕上げられる。外面には淡緑色の灰釉がツケガケされるが、内面は釉薬がかせてしまっている。古瀬戸中期から後期様式に相当し、14世紀から15世紀の所産である。

58は須恵器系陶器の短頸壺である。磨減が強く、成形・調整の詳細は不明だが、内面に同心円当具痕は認められない。口縁端部は丸くおさめる。8本セットの棒状工具で押圧することによって、頸部が強調されている。産地・年代は不明だが、中世の所産と考えられる。

59は越前焼の搦鉢である。8条一對の原体により条線を施し、全体に茶褐色を呈する。端部が残らずやや指標を欠くが、14世紀後半から15世紀後半の所産であろう。

60は常滑焼の甕体部である。外面に押印、内面に粘土紐の痕跡と指頭圧痕が認められる。12世紀を中心とした所産だろう。

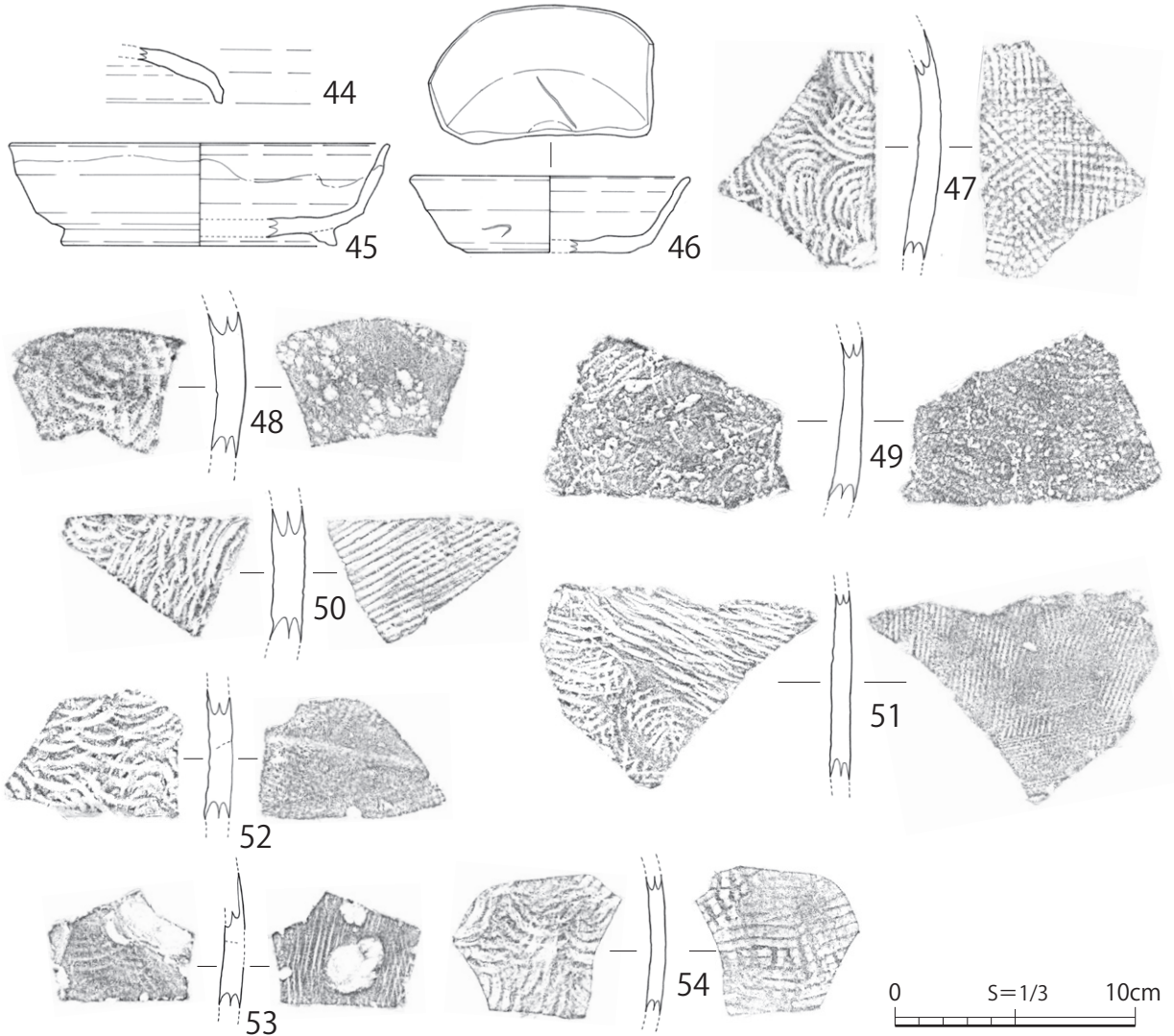


図5 琵琶田川湖底遺跡表採遺物①

61は白瓷系陶器の甕体部である。内外面ともナデにより仕上げられ、外面には押印を持つ。12世紀を中心とした所産だろう。

62～64は常滑ないし越前の甕体部である。

62は外面に押印、内面に指頭圧痕がある。器壁は薄く、12世紀を中心とした所産だろう。

63は内外面ともナデにより仕上げられる。器壁は薄く、12世紀を中心とした所産だろう。

64は外面に押印があり、内面は全面ナデ調整される。器壁は極めて薄く、12世紀を中心とした所産だろう。

### 3. 下坂浜千軒遺跡における遺物組成と成因

図7は今回扱った遺物のうち、下坂浜千軒遺跡における遺物数を所属世紀毎に示したものである<sup>(4)</sup>。これを基に、先行研究で示された見解と遺物の様相を比較したい。

先に述べた通り、下坂浜千軒遺跡においては考古学的調査のみならず、湖底・湖岸部における応用地質学的調査が行われている。その際、地質学的調査ではいずれも明瞭な地すべり痕跡が確認され、その年代は木材の放射性炭素年代法の測定結果や文献に記された古地震の記録から天正13年(1586)に求められていた。しかし一方で、土器に代表される考古資料は数点のみしか確認されておらず、特に中世後



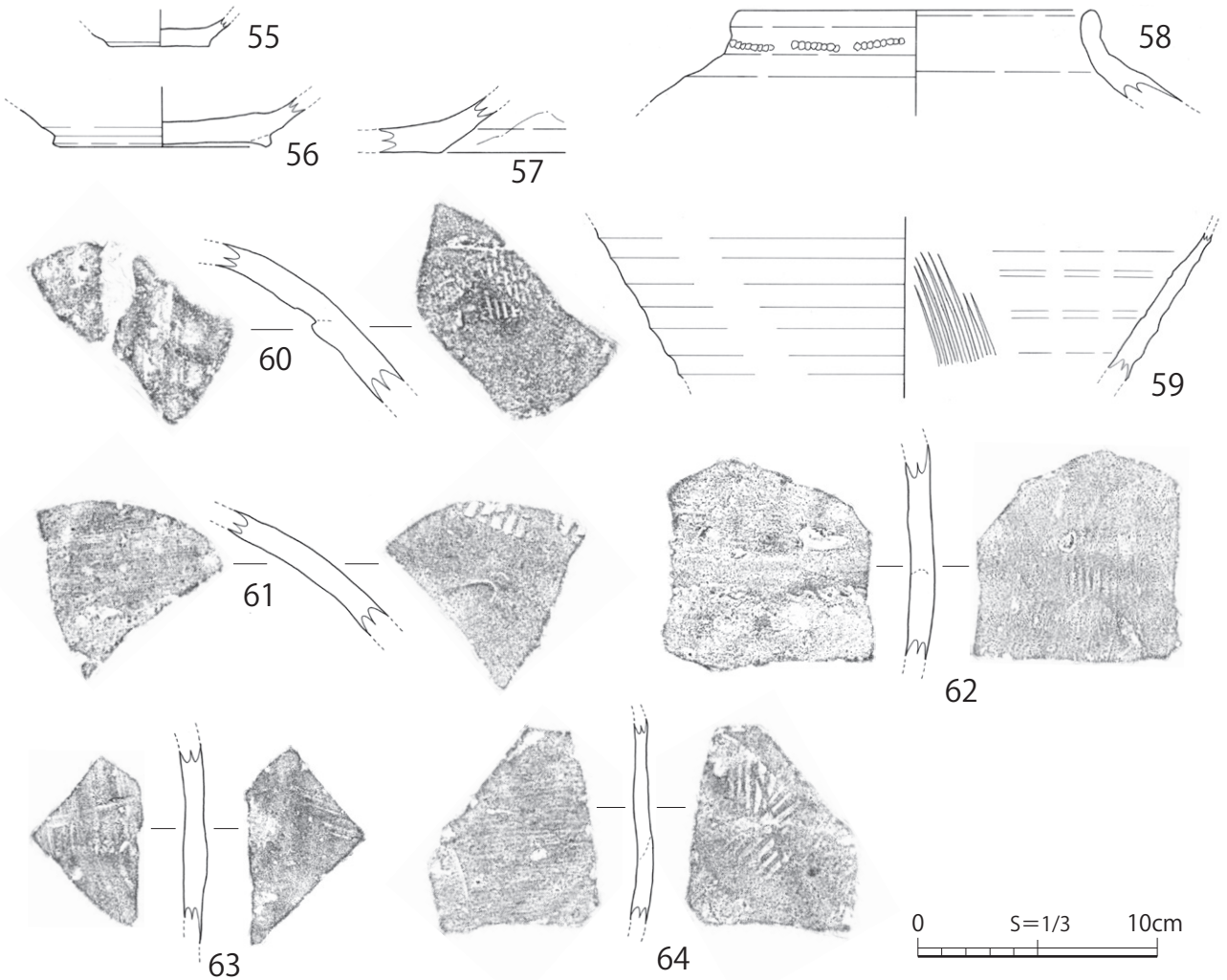


図6 琵琶田川湖底遺跡表採遺物②

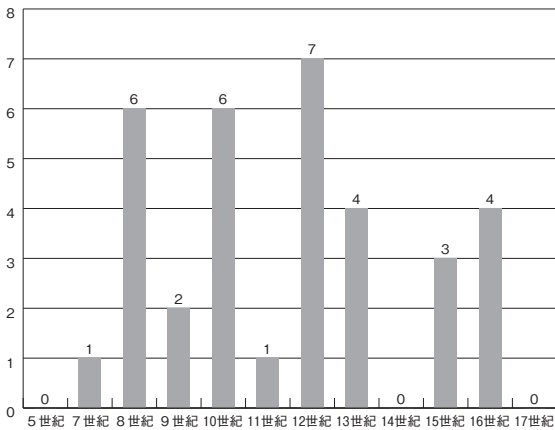


図7 下坂浜千軒遺跡における遺物年代と点数

期ではほぼ皆無であった。加えて年代測定の測定値は1470～1660年頃とやや幅を持つため、議論の余地が残されていた。つまり、琵琶湖の歴史的な水位変動や樹木の性格上<sup>5)</sup>、地盤の沈降によってかつての陸地が水没したことは確かであったが、その時代を巡ってはやや課題を残していたといえよう。

ここで、図7を確認したい。年代測定に示される期間前後のうち、14世紀では全く遺物を認めず、15・16世紀で遺跡が展開した後、17世紀以降には再び認められなくなる。よって今回提示した資料を踏まえると、年代測定された期間のうち、17世紀代における画期の存在は考慮の外に置いてよく、当遺跡の終焉は16世紀代に求められる。つまり今回報告の遺物群は、従来不足していた下坂浜千軒遺跡

の水没伝承に関わる考古資料を補完するものとして捉えられよう。

#### 4. まとめ

以上が今回の成果である。資料紹介という性格上、解説に終始してしまったきらいもあるが、一方でこれまで調査事例に乏しかった水域における湖底遺跡の一端を示すことができたと考えている。今後はこれらの成果を基に、分布調査の密度を高め、遺跡の所属年代や成因に関わるデータの蓄積を行う必要がある。

なお図版として、平成6年度大湯水時を中心とした琵琶湖の写真を掲載している。いずれも用田政晴氏が撮影されたものであり、特に湖東・湖北地域における当時の記録として貴重である。用田氏は他にも多くの記録写真を撮影されており、今後の活用が期待される。

#### 謝辞

本稿の執筆にあたっては、遺物や写真資料について用田政晴氏から大変多くのご教示を頂きました。また調査にあたっては、滋賀県立琵琶湖博物館の渡部圭一氏、三枅友梨香氏のご配慮に支えられました。

他にも、大学の後輩諸氏をはじめ、多くのご協力を頂きました。末筆になり大変恐縮ですが、記して感謝申し上げます(順不同・敬称略)。

伊藤航貴(甲賀市教育委員会)・島田章広(滋賀県立大学研究生)・手塚希望(アジア水中考古学研究所)・戸田龍蔵(滋賀県立大学博士前期課程)・西澤光希(滋賀県立大学博士前期課程)

#### 註

1. 本稿で扱う水位は、琵琶湖基準水位である T.P + 84.371m を基準とした値を用いている。
2. 例えば長浜城遺跡においては、石垣列とされる石材の集積が確認された。これは長さ42.8m、最大幅10m、最少幅3mの範囲にわたってベルト状に石材の散布が認められたものある〔長浜市教育委員会2002〕。報告書では石垣列とされているが、中川らが以前に潜水調査で確認した限り石材はいずれも拳～人頭大と小型であり、石垣石材そのものではなく間詰め石や栗石の集積とすべきであろう。
3. 地震による液状化が起きた際、液状化した層が地下で傾斜している場合に上層の地盤が下方向に向

かって流れ動く現象が生じる。これを『側方流動』といい、傾斜が1%程度の一見平坦な土地でも生じることが分かっている。

4. 所属世紀を跨ぐ場合は、両方にカウントしている。
5. 確認された樹木はスギやケヤキであり、これらは水没すると短い期間で枯死することが知られる。このため、樹木を確認した土地はかつて安定した陸地であり、その後湖底に没したと考えられる。

#### 参考文献

- ・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- ・近江町教育委員会1987「近江町内遺跡分布調査報告書」『近江町文化財調査報告1』
- ・續伸一郎1995「〔4〕中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・百瀬正恒・近江俊英1995「7・近畿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・山本信夫1995「〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- ・長浜市教育委員会2002「長浜城遺跡」『長浜市埋蔵文化財調査資料第41集』
- ・藤澤良祐2005「瀬戸窯跡群」『日本の遺跡』5 同成社
- ・岩田隆2006「越前焼甕・壺・鉢(播鉢)の生産・流通・消費」『石川県埋蔵文化財情報』第15号 石川県埋蔵文化財センター
- ・愛知県史編さん委員会2008『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- ・山田邦和2011「須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代の考古学1 古墳時代の枠組み』同成社
- ・林博通・釜井俊孝・原口強2012『地震で沈んだ湖底の村 琵琶湖湖底遺跡を科学する』サンライズ出版
- ・愛知県史編さん委員会2013『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- ・大西遼2016「付論・西浜千軒遺跡出土の須恵器壺・甕体部の分類一時期・産地比定に向けて一」『西浜千軒遺跡—琵琶湖湖底遺跡の調査・研究—』滋賀県立大学琵琶湖水中考古学研究会

#### 図の出典

- 図1：国土地理院発行『1:10,000 湖沼図琵琶湖8号(2) 長浜2』及び滋賀県教育委員会2011『平成22年度滋賀県遺跡地図』を基に作成

図版 1



1  
長浜市 長浜城跡太閤井戸地区湖水状況①  
当日の水位はマイナス102cmを記録した。  
1994年8月30日撮影



2  
長浜市 長浜城跡太閤井戸地区湖水状況②  
南東方向から撮影 湖岸側に『石垣列』が確認できる。  
1994年8月30日撮影



3  
長浜市 長浜城跡太閤井戸地区湖水状況③  
北西方向から撮影  
1994年8月30日撮影



4  
長浜市 土川湖底遺跡湖水状況  
1994年8月30日撮影

図版2



5  
長浜市 土川湖底遺跡  
山茶碗(図4-35) 散布状況  
1994年8月30日撮影



6  
長浜市 土川湖底遺跡  
灰釉平碗(図4-36) 散布状況  
1994年8月30日撮影



7  
長浜市 土川湖底遺跡  
須恵器甕体部(図4-41) 散布状況  
1994年8月30日撮影



8  
米原市 琵琶田川湖底遺跡湯水状況  
1994年8月30日撮影

図版3



9  
長浜市 湖北町海老江地区渇水状況  
水位低下により畝が露頭している。  
1994年9月撮影



10  
長浜市 姉川渇水状況①  
1994年8月30日撮影



11  
長浜市 姉川渇水状況② 河口部の状況  
1994年8月30日撮影



12  
長浜市 姉川渇水状況③  
四手網漁のために設置された罾ヤナが露頭している。  
1994年8月30日撮影

図版4



13  
長浜市 海津集落の湯水状況  
奥に棧橋の残骸、手前に手洗いを確認できる。  
1994年8月18日撮影



14  
高島市 深溝浜地区湯水状況  
石積み突堤が露頭している。  
1994年8月18日撮影



15  
高島市 三ツ矢千軒遺跡周辺の湯水状況  
当日の水位はマイナス92cmを記録した。  
1994年8月18日撮影

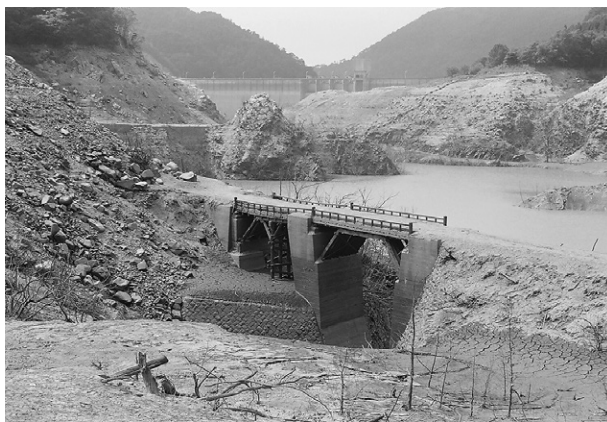


16  
高島市 三ツ矢千軒遺跡湖中石壘の様子  
1994年8月18日撮影

図版5



17  
高島市 安曇川北流の渇水状況  
渇水により、カントリー築が露頭している。  
1994年8月18日撮影



18  
東近江市 永源寺ダムの渇水状況①  
1994年8月撮影



19  
東近江市 永源寺ダムの渇水状況②  
1994年8月撮影



20  
米原市磯漁港で廃棄された木造船の回収作業を行う用田氏  
船はこの後、松原港まで曳航され、現在、琵琶湖博物館に収蔵されている。  
1990年もしくは1991年5月26日撮影